資料・非暴力実践のための訓練技術

■「非暴力訓練セミナー」は、どのような視点と内容によってなされたのか？

■はじめに

ライフセンター共同体の「新しい社会のための運動」が目指している非暴力直接行動による反戦活動は、ガンジーの思想的な流れをくむものであるが、ここでこれから述べる非暴力訓練のための具体的な技術は、アメリカの反戦活動や、黒人の公民権運動などの長い積み重ねを経て研究され、開発されてきたものである。従って、今回日本において組織された「非暴力訓練セミナー」も、ライフセンター共同体が作りだしたものだけではなく、アメリカの様々な闘いのなかで生みだされてきた非暴力実践活動のための試みを結集したものということができるだろう。多くの分野での活動を通して考えだされてきた実践技術の訓練のためには、無数の方法がある。そして又、これは、「非暴力訓練セミナー」を通してクリストファー・モア氏らがくりかえして述べていたことであるが、その方法は常に検討されなければならないし、状況の変化に応じた新しいより効果的な技術が作りだされていくべきものなのである。

我々は、限られたスペースのなかでこれらの多様な訓練技術について十分に触れることはできなかった。そのために、ここで説明を試みるのは、その訓練技術のごく一部にすぎないことをお断わりしておきたい。ここで選ばれた訓練技術のためのサンプルは、クリストファー・モア氏によって「日本で行なわれたもっとも標準的な訓練セミナー」として説明されたものに従った。

ライフセンター共同体のメンバーたちにとって、非暴力の思想とその実践とは、ただ単に不正に対して向けられる政治的行動のためにのみあるのではなく、共同体の生活をしていくうえで不断に活用されていくべき技術なのである。前述のインタビューのなかでクリスは、彼らの日常生活において問題が生じたときにも、これらの技術訓練が解決のために大切な役割を果たすということを力をこめて語っていた。我々も又、非暴力直接行動の論理と実践を、広く我々の実存に根ざしたものとして捉えかえしていくことを要求されているのである。

なおこの資料は、キリスト友会・非暴力についての懇談会が翻訳したパンフレット『非暴力実践行動の訓練』（T・W・オルソン、R・シバース共著）なしにはできあがらなかったことを、お礼と共につけ加えておきたい。

■基本的な認識

非暴力直接行動とは、暴力に支えられた敵対者と同種の手段で闘うことを拒否する行動の形態であり、それは反対派や敵対者をも含めた形での社会的解決を探求し、単に相手に打ち勝つことだけが目的ではない。この行動に不可欠なことは相手の暴力に打撃を与えるよりはむしろ自らが喜んで苦しむことであり、休むことなく闘争しつづけることである。自分たちのとった方針と行動の結果引き起こる一連の事態に対して、それらに修正がいらなくなるまで想像力たくましくかつ力強く対決していかなければならない。

訓練は実際状況に即して用意されるとき最も効果的である。訓練の価値は参加者自身が変革を唱えるとき更に大きくなり、結果的により適切なものとなる。

■なにを訓練するのか？

1、技術の訓練（一般の組織が必要とする訓練とかわりない）――報道人への応対の仕方、住所録の維持更新の仕方、適切な会計記録のとり方等。

2、理論の訓練――非暴力実践行動には具体的な状況と理論の両方に対する感覚が大切である。

3、個人の能力と自信を育てる訓練。

4、危機に対応する訓練――敏速な対応が求められるような状況において何が最も緊要な問題であるかを識別したり、問題の優先順位をはっきりさせる。

5、組織づくりの訓練――グループの結束を強め、組織を強固にするために、長期にわたって参加者の補充、グループの維持、新たに共闘できる人々をあちこちに見つけておくことが必要である。

6、戦術、戦略感覚を育てる訓練。

■訓練にあたって心がけること

1、非暴力直接行動の訓練は人々を実際の状況に対応できるように備えなければならない。

2、訓練は緊迫した状況の中でなされた時、効果をあげる。

3、訓練は実用向きな技術をすみやかに習得できるように組まれなければならない。

4、訓練は参加者自身が反応し、評価するように組まれねばならない。

5、訓練のひとつの目標は参加者が更に自分が他の人を訓練できるような能力を増進することである。

■訓練のあとで反省すること

1、必要な技術は圧力下で出来るかぎりためされたことがあるか。

2、訓練が実際の活動を引き起こしてきているか。

3、知識や原理はどの程度自分のものとなったか。

4、目標はどの程度まで完全に達成されたか。

5、部外者またはよその集団が、訓練に何らかの価値を見い出したかどうか。

6、参加者は集団相互の関係についてどの程度洞察できたか。

7、共同体意識および連帯意識が芽生え、増したか。

8、さらに訓練をしたいと思ったか。

9、訓練における評価の重要性を認識し、その効果をより高める方法を見つけだしていくのに積極的であったか。

（これらの質問のいくつかは、訓練中に出すべきで、いくつかは訓練のあととかずっと先でふりかえってみる時に出したらよい。）

■評価の方法

いかに評価するか、その方法は重要なことである。どの方法を用いるかは利用できる資料、時間的制約、必要な情報によって異なる。評価のポイントは、次のような点である。

1、人々は会合を規則正しく行なっているか、それともだらだらと開いているか。

2、沈黙が続いた場合気をもまないでいられるか、それとも何かをすべきだと感じるか。

3、訓練の計画委員会はだれによって組織されるのか。グループに対してその計画委員会はどういう影響力を有するのか。

4、訓練機構と別個に非公式の協議会とか又は小さな集まりがあるかどうか。

以上のポイントに留意して評価を行なう。

1、観察者――観察する任務を与えられた個人またはチーム。観察者は能力が必要であり評価の内容と方法を心得ていなければならない。

2、集団全体――参加者自身も訓練の進展に応じてその経過を評価する。

3、日記、訓練日誌、その他の報告書

4、会合の議事録および会の日誌、テープレコーダー

5、書類の内容分析、資料の系統的分類方式、テストと質問票、理論と図式

6、会見と討論

■訓練の方法

1、紹介――訓練に参加した人々は、まずお互いの紹介から行なうが、ここではいわゆる普通の自己紹介をするのではなく、全体が早いうちにより親密になれるような方法がとられる。一例をあげると、一定の与えられた時間（五分間前後）AとB、CとDというふうにとなり同士が自己紹介をしあい、そのあとのグループ全体の紹介のときには、AはBについての紹介を、BはAについての紹介をそれぞれ行なうといった方法がある。日本人のように、初対面のときには比較的打ちとけにくい性格を持っている場合でも、この方法はグループの空気をなごやかなものにし、そのあとの訓練にすみやかに入っていくことができる。

2、ブレイン・ストーム――直訳すると、精神錯乱とか脳波という意味であるが、訓練セミナーにおいて内容の意味するところのものは別なところにある。この訓練はふつう、黒板か紙を用意しておき、参加者は与えられたひとつのテーマ（例えば「私にとって理想社会とは何か」）について、頭に思い浮かんだことを次々と出していく。

あるセミナーにおいてこのテーマでブレイン・ストームを行なったが、まず第一に、ふだん理想社会について云々していながらも、いざ具体的なイメージについて述べることを要求されると、そのイメージが意外と漠然としていることに気づかされた。同時に理想社会といっても、参加者各人の持っているイメージに大きなちがいがあることを発見したものである。この訓練は問題の所在をはっきりさせることに役立つとともに、他の人たちの考え方を知るうえで役立つ。

訓練の目的により即したテーマについてあ

げれば、例えば「非暴力」「暴力」とは何か、というテーマがあげられる。問題をさらに具体的にすると、「非暴力的行動」とは何であり、「暴力的行動」とは何なのか。いったい暴力と非暴力とのあいだの境界線はどこに引くことができるのか。これに答を準備することは非常にむずかしいし、たとえ社会変革をめざす人々の集まったセミナーであっても、参加者は他の人々との考え方の相違を発見することになるだろう。

この訓練の場合には、お互いが意見を出しあっているときにはそれについて議論したり批判したりしてはいけない。議論や意見への評価は、ブレイン・ストームのあとでなされるべきである。

3、リスク・リスト――実際に行使されてきた非暴力の戦術は一〇〇を越えているという。それらの非暴力直接行動の方法はいくつかのジャンルに別れて整理されているが、そのうちのいくつかを取り出してここに並べてみよう。

1、抗議の投書をする。
2、デモに参加する。
3、断食、ハンガーストライキを行なう。
4、非暴力的占拠を行なう。
5、街頭で演説を行なう。
6、戦争に反対する政党に投票する。
7、税金支払いの拒否。

リスク（危険）・リストの訓練においては、一例としてここにあげた七つの非暴力的行動のうち、参加者は自分にとって加わりやすいものから順に並べていく。そしてどの方法ならば参加することができ、どれには参加できないか、そしてそれはなぜなのかを考える。この訓練では、各人のおかれている状況のなかでなにをすることができるかを知りうるだろうし、他の人々が物理的、道徳的観点からどの種類の行動になら参加できるかを知ることができる。

4、戦略ゲーム――これは政治的・社会的に対立関係にある二つのグループを設定し、全体を二つのチームに分けてそれぞれの立場を演ずることによってなされる訓練である。

例えばここでは、非暴力社会変革を目ざすグループと暴力革命による社会変革を目ざすグループとの戦略ゲームを設定してみよう。まず各チームは別個に話し合って、それぞれの立場からの社会変革のプログラムを作成する。暴力革命の立場に立つチームは、徹底した暴力の力によってどのようにしたら社会変革が可能になるかを考えていくわけである。そのあとで各チームはお互いの戦略を説明しあい、質疑および討論、評価を行なう。

この訓練は、参加者に対立関係にあるグループの実際の理論や条件についての十分な知識がなければ、効果的な訓練にはなりえないが、慣れてくるに従い、いろいろな状況のもとでの戦略ゲームを行なうことができる。

この訓練からは設定されたグループに関する理論を学ぶことができるし、それらの実情に対する自分の無知や誤解なども明らかになる。

5、ロール・プレイ――これは設定されたある状況において、参加者がそれぞれの役割を演じあう訓練である。

例えば日本のセミナーにおいては（「非暴力訓練セミナー報告」のなかでも描写されているように）、相模補給廠ゲート前の設定がよく取り上げられたテーマであった。

この状況の中では、機動隊、非暴力直接行動活動家、実力阻止を主張する学生、群衆、挑発者などを登場させることができる。参加

者はそれぞれの役割に分れて、その役割を演じきることにより訓練を行なう。

ロール・プレイは現実状況とは異なるが、実際の場にのぞんだときどのように行動し、不測の事態にどう対応するのかを学ぶことができる。勿論、訓練の時点では危険もなく緊張も少ないが、参加者が現実感をもってこの訓練に参加できなければ、この訓練の効果は半減する。従って、実際の政治活動に参加の経験がなく補給廠のゲートに行くつもりもない人々が、そうした状況設定のもとでロールプレイを行なっても、それはゲームのひとつにすぎなくなる。

他の訓練もそうであるが、ロール・プレイもいろいろな場合に適用することが可能である。ある役割を演ずることによって、ふだんは自分とは関係のない立場にある人々を理解するキッカケになるというこの訓練の長所は、共同生活を行なっていくうえでも大いに生かされるものであることを示している。

6、事例研究――非暴力的方法によって闘われた運動の歴史は、インドやアメリカばかりではなく世界各国にある。事例研究は過去の運動の研究を行なうことであるが、非暴力運動がいかなる理論と戦略とを持って現実にはどのように適用され、どんな結果を生みだしてきたのかについて学ぶことである。

■訓練の限界

非暴力の真理のためにここで訓練そのものの考え方をある程度評価しなければならない。訓練によって非暴力活動が一挙にこの世を救うものではないということをはっきりさせておきたい。現在の訓練方法がまだ洗練されていないこと、比較的少数の組織しか訓練を行なっていないこと、まして訓練できる人の数はもっと少ないことなどは、すべて非暴力実践技術の訓練がまだ幼年期にあることを示している。

事実、訓練は新しいものではない。インド解放運動、その他でも何らかの訓練の例はある。健全な運動に我々が求めている非暴力主義の一貫性、人間らしい組織、公明さおよびその他の特質を達成するという一般的な実践活動に伴う諸問題が、訓練をすればなくなるわけでない、ということをはっきり知っておくべきである。更に訓練が実際になし得る以上のことを期待して、準備の方法としてそれを当てにしすぎるようになるかもしれない。訓練は組織作りの一形態であり得るけれども、ある状況下ではさほど有効なものとは言えないこともある。

非暴力運動の組織者も支持者も、自分達が事件の発生を正確に予知できないという事実を受け入れねばならない。このように訓練は運動の成果を確証することはできない。しかし、どんな訓練が行なわれるにせよ訓練は参加者の融通性を増すような方法が見い出されねばならない。

非暴力の訓練は内部的諸革命、国内及び国際的非暴力的平和維持その他広範囲の問題に対して価値あるものを付与できるために、もっともっと発達しなければならない。しかし、訓練のこれまでの発達は現実的また実際的な問題に答える形でゆっくりと自然に行なわれてきた。我々はまだほんの少しの道のりしか旅してこなかったことを残念がる必要はない。むしろ我々の社会変革の要求に適確に答えうる訓練をするためには、まだまだ道のりは遠いということを認識しなければならないのである。

非暴力社会変革グループの基本理念

資料・非暴力による変革のための戦略

■訳・中島泉／軽部洋子

現在の秩序を明確に分析したり、新しい社会の偉大なる設計を描いたりしても、現在地点からそこまで行くにはどうすればよいのかという点になると、まだ依然として確かなものはないというのが現状であろう。

現在の制度に対抗する制度の建設に専念すればよいのか、それとも射撃訓練か、抗議デモか？　それとも学生や労働者や失業者や市民達を組織化してゆけばよいのか。

何をすればよいのかという決定は、衝動や流行の運動形態に基づいてなされる事がしばしばある。例えば建物を占拠するといったような戦術は、その時点での心理的ムードに合うという事から取りあげられる場合がある。しかし本当の長期戦は、このようなところに基盤を置いて行なわれるものではない。

ムードや流行といったものは、あまりにも容易に、抑圧されてしまうものだからである。

ローザ・ルクセンブルグが、我々は最後を除く全ての戦いに敗れるであろうと言ったのは誇張であったとしても、その基本的趣旨は妥当である。すなわち、戦いは長く困難であり、我々の活動を短期間の心理的満足によって評価することはできないという事なのである。

さらにまた、衝動に基づく闘争は非民主的である。闘争についての決定への、より多くの人々の参加は、広範囲の話し合いを通してのみ可能であり、そのためには時間と計画的見通しが必要となってくるのである。

危機的時点が来るまで戦略決定を行なわずにいるという事は、中央委員会あるいは、ムードや流行の操作に非常に巧みな民衆煽動家に権威を委任する事を意味するのである。

戦術――個別の時点における行動――は即断で可能な限り適格に行なわなければならない事がしばしばあり、このような場合には、リーダーが大きな役割をもってくる。

戦略――行動を組み合わせて運動力を蓄積発展させる為の、また戦術検討をする為の全体的計画――は非常に重要であり、リーダーにのみ任される事はできない。

■戦略を練る

最も効果的な戦略は、歴史的情況にあったものでなければならない。

例えば中国共産党は、始めは西欧から戦略を借用し、工業労働者を組織しようと試みた。しかし、毛沢東が中国の情況にふさわしい戦略を考え出し、労働者よりも農民、都市よりも地方（地域）に力を入れるようになった時初めて、より多くの成功のチャンスをつくる事ができた。

ベルギー社会主義者達の普通選挙権獲得闘争において、一時、フランス革命の伝統を輸入し、暴力戦略を尊重する時期があった。しかし、労働者達がバリケードへのロマンスを捨て、広範囲の話し合いを行ない、整然としたゼネストを決定した時に初めて、目的を達成した。

戦略は、情況と明確に関わるものであればあるほど効力をもってくるのである。どのような情況においても、たとえそれがどんなに除うつなものであっても、必ずいくつかの糸口があるものなのである。（ヒットラーの強制収容所においてさえ、組織された抵抗運動があった。）

有望な創造的革命家は、この糸口を見いだし、運動計画を推進していくことであろう。

■革命の過程

独自の戦略を開発する必要性があるという事は、他の人々の経験から学ぶ事を防げるものではない。各国における闘争活動の経験を分析し、我々を失敗しないように導き、好機に向わせるような枠組とすることができる。

正義の為の闘いにおいて苦しんだ人々を敬意をもって遇するという事も、彼らの経験を誠意をもって受けとめるという一つのあり方である。

我々の基本的視点は、運動の発展そのものに注目するものである。というのは、我々はまさに成長過程における運動組織形態と行動形態自体の内に、新しい社会の種を見いだすからである。もちろん主要なる運動条件は、意図的操作を越えた広大な社会的諸力によって規定されてくる。たとえば経済的条件、生態学的緊張状態、旧体制の衰微、新たな可能性への期待の興隆などである。

運動の役割というのは、絶え間なく成長し、更新し、運動内部の生活においてその価値を実践し、新しい社会を設計してゆく能力を深めてゆく事を通して、闘争を効果あるものとするところにある。

我々は、少数の運動家から、基本的変化を経た後にくる大衆闘争活動までの間に、運動の五つの発展段階を置いている。

(1)意識化　(2)組織形成　(3)対決　(4)大衆による非暴力　(5)対抗政府

■意識化（第一段階）

なぜ自分の生活がうまくいかないのだろうか？　なぜ自分はこんなにも無力であるのだろうか？　決定を下す人々は、心から私の為に一番良いと思う事をやっているのだろうか？　なぜこんなにも多くの人々が私と同じようなめに会っているのだろう？

情況が悪化するに従って、より多くの人々がこのような疑問を抱くようになる。彼らは自分達の問題を通して、より大きな世界を批判的にながめるようになる。そして、集団意識を持つようになってくる。というのは、労働者、婦人、黒人は個としてではなく、階級として搾取されているからである。人々が共同行動をとれる為には、個としての運命と切り離せないものであるという認識を深めなければならないのである。

この段階において、運動家は人々の政治意識を発達させ、個人的問題を公的論点に翻訳し、個々の人間を被抑圧社会における他の人々と結びつけていかねばならない。それには、社会構造を明確にする為の分析が必要であり、この分析によって人々は支配の原動力を理解していく事ができるのである。

消極的運動はそこで終わってしまう事もある。不正義を指適し、不平等について分析し、果てしない抗議をして事足れりとするのである。しかし積極的運動はさらに進み、新しい社会の構想を練り、怒りだけでなく大きな抱負をいだくのである。

しかし、分析をし構想を練るだけでは十分ではない。というのは、抑圧された人々には無力感が浸み渡っており、それは、変革の為の強力な戦略なしには取り除かれないからである。変革の「なぜ」と同時に「いかに」を

十分理解した時に、彼らはすぐにも活動を開始するものなのである。

意識化の段階で使用される戦術は普通、パンフレットの作製と配布、演説、研究グループ、新聞、協議会などである。教育の方法も、もちろん人々の環境に適したものでなければならない。

刷新は、方法論においても必要である。特に既存の方法が、運動のエリート意識を高める場合にそうである。新しい教育方法は、たとえばパウロ・フレリーなどによって考案されている。彼は「意識化」(Conscientization)という言葉を作り、時間をかけて集団意識を発達させていく間接的方法を通して、思慮深い行動を学んでゆく事を強調している。

非暴力訓練活動においては、また、政治教育の方法も開発されてきている。たとえば、戦略ゲーム、シナリオ作製、ユートピア・ギャラリー、ロールプレイ、事例研究などである。参加する事によって技術と知識を学んでゆくという方法をとるという、活動家の使用する方法手段そのものにおいて、運動が民主的なものであり、指導者の雄弁よりも、人々の理解に基礎を置くものであることを示すのである。

多くの国では、政治化の段階はすでにかなり進んでいるが、しかし同時にそれは決して終わるものではないという認識もされている。運動家は、絶え間なく広がっていく活動範囲内において活動すべきであり、運動の核心がとっくに変革過程の進んだ段階に到っている時でも、人々のある部分は依然として、自分達の不満の諸要因についてさえ漠然としか把握していないのだ、という事を認識する必要があるからである。

活動領域を広げていく事によってまた、運動家はより多くのことを学んでいくのである。というのは、表面的には非政治的とみえる人々の中にも、知識や発見が蓄積されているからである。自分達の教育活動を宣教としてとらえるのは、党派心の強い人達だけである。彼らは、自分達はすべての真理を所有しており、それを布教しさえすればよいと考えるのである。

本当の教育は、相互の作用を含むものである。民主的運動は、可能な限りすべての洞察に学ぼうとするものであり、不注意に「敵」というレッテルを貼られている人々からさえも、学ぶものなのである。

■組織形成（第二段階）

アジ演説は一個人でもできるが、革命は人々によって初めて可能となる。ある価値観を例としてあげるのは一個人でもできるが、新しい社会秩序の原型を実践していくのは、集団によってのみ可能である。

ちょうど、賢明な農夫が種蒔きだけにかかりきりにならずに、若芽の世話をするように、賢明な運動家は、革命的精神が成長していくように、組織者となって適切な社会環境を整えていくものである。

新しい社会の為の組織づくりは、根底に緊張を伴なうものである。組織形態は、基本にある構想を明白に文字通りに反映するものである為、それは社会変革の為の手段というより目的となってくるという事があるからである。革命家は、諸々のセクト内に孤立していく。そして一方では、運動の組織形態は既存の文化に非常に適合したものとなり、人種差別、男女差別、権威主義などといった、廃止されるべき形態を反映してくるのである。

このような古い皮袋には、進歩的構想という新しい酒を入れる事は、ほとんどできない。口述される価値観と具体的に実践される事の間の矛盾があまりにも大きいからである。

個々の組織形態は、場所によって異なるであろうが、我々はここで、基本的原則を提出したい。それは、手段と目的とは一貫するものでなければならないという事である。

平等社会は権威主義的運動によっては望み得ない。信頼に基盤を置く社会は、指導者間のあらそいからは生まれてこない。人々の独立独歩の能力は、堅固な官僚組織によっては芽を出さない。

手段と目的の一貫性は、決して目的が手段の中に崩壊していく事を意味するものではない。目的としてかかげられる理想的共同社会は、それ自体においては多くの場合、社会変革と無関係である。それと反対に、変革の基地としての共同社会は、革命諸党派にみられる限られた形態に代るべきものとして重要である。それは、革命を起こすと同時に、革命を生活実践していく道を開くのである。それは、運動にたずさわる人々が、より強くなり、明確な見地を身につける為に個人的変革を経験していく訓練の場を与えるのである。

現在の制度に対抗する制度や建設的プログラムもまた、組織刷新に機会を与えるものである。新しい社会は、平等な方法で組織することができるだろうか？　合意による決定は広く適用できるだろうか？　どの機能を地方分権にし、どれを中央集権にすればよいのか？　このような問題のいくつかは、運動によって探究されるので、実際に体制が交替する時が来た時には（第五段階）役に立つ活動経験が蓄積されているのである。

とってかわるべき新しい制度は、ほとんどの国々において高価あるいは不適当な形でしか行なわれていないことをすみやかに行なうものである。これは強力な広報活動形態でもある。というのは、このような活動を通して、運動従事者達は変革を目指してはいるが、基本的には、建設的方法をとり現実的に物資の需要にも対応していくものである事が示されるからである。

この新しい制度が、人々へ力を与えるかわりに、人々に奉仕するだけの慈善事業に陥りやすいという弊害はある。ほどこしによっては、本質的変革をもたらす事はできない。なぜなら、それはまさに差別制度の眼目をなしているものだからである。施しは人々を変革に向かわしめずに、むしろ彼らをして非実際的社会改良者に依存し続けさせるものである。

建設的プログラム（ちょうどガンジーの場合のように）は根本的変革をめざした大衆闘争活動に連結していない限り、単なる慈善事業となるのである。

大衆による運動が存在する時に初めて、新しい社会は実現されるのである。なぜならば、大衆運動のみにその力があるからである。

その上、自由は少数者によって多数者にもたらされるものではなく、どうしても大衆の参加を必要とするのである。自由は本来的に、活発に探究されるべきものなのである。

また他方においては、人間解放は集団内に埋没して自己を喪失するのではなく、深い意味での個における自信と価値の認識を伴うものである。

我々は、大衆運動を創っていく時の基礎的組織単位は、親密な小集団がよいと考える。小集団ならば個人を擁護する事ができ、簡素化され、共同化された生活形態を試みる事ができ、より大きな運動体の中にあって一つのチームとして活動する事ができる。そのような集団は既存の友交関係とか職場や宗教関係のつながりなどから創られる事ができる。それらは細胞が大きくなるように大きくなり、条件が整った時に急速に増殖していく事ができる。共同体とは異なり、それは必ずしも共同生活を伴うものではないが、お互いに人間

としての接触があるので、個々人が成長していく為のよい活動環境となるのである。

大衆運動の基本的単位としての親和集団は、集団本位主義と個人主義のジレンマを解決するものである。いくつかの旧共産主義細胞とは異って、その形態は秘密であったり陰謀的である事はなく、暗黙裡の脅迫によって個々人を集団に厳格にしばりつけたりする事はない。また一方では、個々人が自分自身に対して持つ過度の執着から脱け出す為に必要な、十分な集団性も備えているものである。

団結は人々が抑圧の恐怖に共に立ちむかっていく事を可能とするものであり、放水や小銃弾に直面した時は、未組織の大衆よりも、チームとしての方にその可能性が大きいのである。

戦場での様々な情況下における戦闘員についての研究によると、小単位における結束が、恐怖を克服し攻撃に耐えていく為に決定的要因である事が示されている。恐怖はもちろん抑圧の主要武器だからである。小集団活動において我々は手をつなぎ、共に抑圧との闘いを続けるのである。

情況によっては、改良者達の組織下で活動するのも必要な場合があるだろう。しかし時には、彼らが根本的変革の必要性を理解するように、進歩派の協議会を、これらの組織内で設ける事も考えられるのである。

大衆は、もし改良によって情況が十分良くなると思えば、根本的変革にはふりむかないものである。もしこの分析が正しいものであるとすれば改良は十分なものではなく、根本的変革が必要なのである。

民主的運動における我々のスローガンは、「根本的意識の無い所には根本的変革はない」というものである。我々は人々の背後で行なわれるような革命を信じない。

改良者達の組織では、めったに根本的分析や構想を取り入れようとはしないであろう。従って、歴史の要求に根底から対応できる新たな組織を創る事が必要となるのである。この初期段階においては、寛容性よりも、明確性の方が重要である場合がしばしばある。

もし達成された場合、力関係に非常な変化を伴うため「革命的改良」と呼んでもさしつかえのない改良もある。

経済学による分析は、こういった闘争の主眼目を指適し、変革過程の次の段階——対決——に達する為の重要な示唆を我々に与えてくれる。

■対　決（第三段階）

悲しい事に、ペンは力より弱い。パンフレットや小冊子が容易に手に入り、不正の真相が広く知られるようになっても、ほとんどの人は無抵抗のままじっとしている。新しい社会を目指して大衆が動きはじめる為には、政治化という第一段階だけでは充分ではないのである。邪悪な事実は、劇的に表現されなければならない。

過去において、この劇的さはしばしば効果をあらわしている。

一九〇五年、ロシアの血の日曜日事件は、皇帝の圧制に対する大衆の反乱の導火線となった。

一九一九年、インドのアムリッツアー大虐殺事件は、イギリス帝国主義に対する最初の市民的不服従のきっかけとなった。

一九六三年、アラバマのバーミンガムの黒人に対する抑圧は、アメリカにおける急進派と自由主義者達をして、人種差別撤廃の法令化にのりださせた。

劇的に不正に対決する最上の形態は、一日二日のあいだ公けの訴えをするよりはむしろ一定期間を通して、キャンペーンを行なうことである。一般に、キャンペーンはひとつの宣伝を行なうよりも、より多数の人々をより深く教化するものである。

第一段階は革命的変革といったような急進的判断と相矛盾しないキャンペーン目標を選ぶことである。第二には、不正がどういったものであるかについて説明する必要を省けるように、問題と解決とを図式化することである。その図は、一般に支持されている価値と不正の特殊性とのギャップを示し得るものでなくてはならない。第三には、その図に鮮やかな色彩をつける集団活動を起こすことである。キャンペーンは当局をジレンマにおとし入れるような危機をつくりだすべきである。その危機の内にあって、当局がデモを許可するならば、結構なことである。というのは、行動はドラマチックに不正の状態を突いているということを意味することになるのだから。もし当局がデモを鎮圧するとしたら、それも結構である。その鎮圧は体制が依存しているところの暴力を更に深く暴露することになるのだから。

この「ジレンマ・デモンストレーション」は単なる挑発行為とは大きく異なっている。挑発においては、即時的結果として、目標はデモ隊の頭上に圧力がかけられることを招くものである。ジレンマ・デモンストレーションにおいては、キャンペーンをする者たちは軍用の盾、黒いサッシをまとう等して純粋に行動することを欲してゆくものである。デモ隊は、たとえ当局が予期せぬことにデモの継続を許可しても、失望はしない。自発的に苦しみを受けとめることは、状況を劇的にし、さらに当局の不正な合法性にくいこんでいくものであるから、鎮圧もまた受けとめることができる。

ほとんどの社会にあって、急進的な社会変革は必ず政府によってなされる暴力を避けがたいものとする。不正はそれ自身を守るために暴力を必要とするものであって、それは避けがたいものである。例えば、不平等に異議が唱えられた際、有閑階級はいくどもその抗議をうちこわそうとした。

戦略上の問題点は、いかにしてその暴力を我々に対してではなく、政府そのものに対するものとして働かし得るかという点にある。柔術においてそうであるように、暴力と間接的に対することによって政府自身の力をそれ自身に対立させることが可能である。鎮圧をはかる暴力に向かって銃を発射する代わりに政府の上層部と対決することであり、この運動は暴力によらない対応をひき出すものである。

これには二つの側面がある。すなわち軍隊および警察内部に士気阻喪をおこしはじめる。これは革命の後期段階でその速度を増すかもしれない。大衆の目に、これは政府への不信として映るであろう。

自発的に苦しみを受けることは、決して回避せずにもちこたえてゆくことによってこそ起動力となるものであり、それにかかわる者には意識化と組織化の用意が必要とされる。我々自身と世界についての意識を変え、戦略を推し進めることによって、実際の闘争に確信を得、また直接的行動戦術の訓練を行うことによって準備を終えることができる。小さな闘争共同体に参加することによって、政府による恐怖に直面する際に必要な連帯を発展させるべきである。

活動グループは、一ヶ月から数年の期間にわたって、まず言葉による情宣活動、同盟関係体における訓練と移動、さらに行為のプロパガンダを行なう。対決で即時的な目的が達成される場合もあるし、鎮圧される場合もある。対抗機関の支持を得るには、革命指導部

が、労働組合内部、あるいは同業者連盟内部で、支持の呼びかけを行うことで結びつける。

これらの政治劇は圧制をおおい隠している神話と合理化を透視し、現状を白日の下にさらすべく暴力を顕在化させていくものである。

最近、運動体アジテーターのなかには、新しいサークルで意識化のための活動をし、住民のうちに革命的プロセスをより広く形づくろうとしているものもある。情宣家たちは人々に新しい刺激を与え、彼らが不正に慣らされてしまっている部分を照らしだす。組織者たちは、こうして目ざめた人々同士が、闘争のために必要な連帯の絆を見いだす手助けを行なう。

革命的プロセスは歴史、すなわち経済状況、生態上の緊張の度合い、政治的確立の程度に大きく関連するものである。革命が非常に速やかに起こり進行する社会もあれば、ずっと緩慢に進む社会もある。対決は、大多数の住民が現政府に対して非協力の姿勢をとるまで、主流の運動として続くことになる。

■大衆による非協力（第四段階）

体制は、我々が「然り」と答えることで存在している。我々は、「否」と言うことによって、いかなる抑圧的な制度も我々の承認に依拠してのみ存在できるのだということを学び直すのである。

一九〇五年のロシア蜂起にあっては、政府の弾圧によってひきおこされた全面的市民暴動は、最初の期間、人民をして体制否定にむかわせたが、それだけでは十分でなかった。一定期間、さらに言えば一年間以上の時間が、劣勢であることがあたりまえとなっている我々の状態を変えるのに必要とされる。戦闘、デモ、権力および当局に対する間断ない摘発が継続されていかなくてはならない。それ以外には幸福感と激怒との隔りにあって決起する術を学ぶことはできないであろう。

それゆえ、運動は組織化された計画、長期間にわたって選びぬかれた形態で、大衆の非協力活動が行われるということが要求されるのである。非協力運動は常に、達成された段階では革命的変革となるように、明確に意義づけされ限定された目標に焦点をあててゆくべきである。これによって、自分たちが無力であると考えていた者たちは、何事かを成したことに気づくであろうし、闘争は無用であると考えていた懐疑論者は自らの誤りに気づくであろう。

抑圧的な制度の中で、経済は非協力運動が最も傷つけやすい部分であるが、直接的経済活動に対する鎮圧活動はきわめて厳しいものとなるであろう。したがって、ここで組織化と準備が十分になされることが重要である。

非協力を表明するための経済的戦術はきわめて多様である。たとえば、三日間の全面ストライキ、ボイコット、サボタージュ、賃貸拒否、体制側にとって非常に重要な特殊産業での全面ストライキである。

住民一般での政治的非協力は、市民大衆の不服従、選挙ボイコット、徴兵拒否、学生による政治ストライキ、納税拒否が含まれる。立法府議員は抗議のために退職したり、議会をボイコット、あるいは議会に出席して議事の妨害をすることができる。州政府で働いている者たちは、非協力の機会もたくさんあり、また運動に有益な情報を提供することができる。

この時点まで、運動は強大な妨害戦術を行なうことができる。この妨害活動とは、人々が旧秩序にあって仕事が続けられていたその場において、今度はその仕事を崩壊するように従事することである。現状を物理的に混乱させる能力に加えて、人々は行動によって「現

在から未来を」という強力で象徴的な示唆を行なうことができる。つまり、設備ひとつが、新社会においてはどのように利用され、かつどのような利用方法の進展がみられるかということについて、イメージを与え得るということである。このような戦術は、当局に前体制状態の復興という課題を負わせるものであるし、かりに闘争が失敗しても、新社会の一断面は植えつけられたことになるのである。

かつてマキァベリは、人民の服従が解体するのを目にしては、もはや統治者たり得ないと記した。曰く「国民全体を敵としている君主たるもの、決して己れを安全に置いておくことはできない。残虐であればあるほど、自分が布く体制はより弱くなるであろう。」

弱体化の実際的尺度として、警察、兵士の士気阻喪がある。一九〇五年蜂起の経験からレーニンが発見したように、革命的状態の中で射殺されずに残った兵隊ほど無力になり、自信を失なうものはないのである。運動が目ざす目標は、人民を使って勝利することではなく、人民をして勝利せしめることにある。この段階が基本的に開かれた時はじめて、過去においてはたびたび正義のための闘争を歪めてきた暴力とそれらの対抗暴力との果てしないくりかえしに決定的な突破口をつくり、抑圧する者たちに対してさえも友愛精神が保たれるようになる。

この期間に、第二段階において植えつけられた対抗組織、および他の組織形態において、我々が打ちあげた非協力キャンペーンに関して、それまでの非協力運動推進者であった人々が、虚無主義者になるのを防ぐに役立つ選択権を与えるなどの具体的な要求をはじめ、急速な成長が要請される。小規模の類似団体、革命幹部会、また他の運動組織はこの段階までに強力で対等なつながりを伸ばしておかなくてはならない。持続する大衆行動には団結が必要である。

社会によっては、四段階の革命的過程で十分基本的変化をなしとげられるものもあるが、大衆による非協力によって推進される一連の革命的変革は権力の配分と経済の基礎を決定的に変化させるであろう。この成りゆきは、全体的構造の関連に全く依拠している。

しかしながら、ほとんどの社会において、ある明確な目標に向かっておこされた大衆非協力運動は全面闘争という障害の壁に、結果的にはつき当るものである。そのなかから権力移行が生まれるのであるが——非協力運動は占領促進といった直接介入による一般化され、かつ集中したものとなる必要がある。歴史的に多数の無慈悲な専制者たちは、全面的大衆非協力運動による社会的転換によって排斥されてきた。次の段階は、権力移行の最終段階、対抗政府の設立である。

■対抗政府（第五段階）

革命運動によって、政治権威の通常の機能がこの段階で引き継がれる。民衆は政府のかわりに、この運動体に税を納める。運動体は交通機関の調整や、ごみ収集などといった必要なサービスを組織化する。

自らを変えていくことができなかった体制は、人々から信頼を寄せられなくなる。こうして民衆が以前の体制から目をそらしはじめたとき、新しい制度が開かれた新秩序の一部となる。従ってこの段階は、組織化——建設、これはもちろんいつまでも終了することはないのだが——の第二段階と直接連なっている。

中央委員会によって支配されている大衆党が、州の装置調整のための決定的闘いで統治者と対決するということを、我々が提案しているのではないことは明らかである。また、少数の先鋭職業革命家がクーデターをおこす

ことを提案しているものでもない。旧秩序は、数多くの段階で多くのグループによって攻撃され変化する。つまり、民衆自らが自分たちの生活をかたちづくっている機関の操作を行なうというのが、我々の理解しているところのものである。ここでは、労働組合や同業者組合内部の革命指導者が中心的役割を果たすことになる。というのは彼らは新しい社会としての機関を再組織するに必要な経験を与えることができるからである。

この人民党型権力移行、および調整は、指導部、同調組織、友好委員会、労働組合などの連合から生まれてくるものである。民衆がより広範な輪として参加するということで、第一段階の時点から新社会を生み出してゆくことが既に始められているのであるから、革命的プログラムは、その裏づけとして多大な同意を得ることができよう。

戦闘状態は、正規の社会的機能が民衆による機関にひきつがれてゆくにつれて、外ならぬ革命の過程で、消滅してゆくであろう。第五段階において、党あるいは州官僚からの指示を待つよりも、むしろ既に広く討議されてきた計画に沿って労働者が自分たちの工場を占領し操作を開始するから、権力の再分配を経済機能の再組織が成るまで延期するということはしないですむ。

鎮圧はこの段階では非常に複雑である。通常に、非暴力革命は暴力としての無効力さゆえに、全体にわたって兵隊たちの同情的反応をひきおこす。事前の親睦は兵隊たちの内に不忠をかたちづくるであろう。一方、警察や軍隊には旧体制への忠誠を変えぬものもあるし、また反動グループは政府が秩序破壊にもちこたえ得る能力があるとみれば、それ独自の行動を必らず起こすであろう。したがって、大部分の地域においては平和的権力移行が行なわれる一方で、きわめて残忍なものとなる地域もでてくるかもしれない。

数多くの革命のうち、実際の権力移行に暴力が伴われたことはいかに少なかったかを――例えばロシア革命についても――歴史家たちは書きかえてしまっている。民衆は、挑発に非暴力的に応じる用意ができており、また兵隊の職場放棄を促すゆえに、大がかりな暴力的鎮圧は、我々が利用する構造をもってしても予測する以上に少ないものである。

軍政州の権力と巨大な自治体を消滅させ、人民の民主的機関へと収斂させていくことは、革命を起こした際、手速い方法であるが、しかし革命の流れについてのより広い見方もできよう。革命とは、人民機関が権力を握ったときに終了するものではなく、継続的に発展してゆくものであると、我々は理解している。人民機関の形成過程にあって、権威主義、どん欲、無知、そして恐怖はひき続きあるであろうし、また再三、それらによる攻撃にさらされる必要があるのだと我々は認識している。

非暴力革命過程は、応汎に隠やかな戦闘状態をとることを通じ、人々をして歪められた機関に対し武装を行なわしめるものである。民衆は、真実の力の使い方を闘争のなかで学ぶであろう。我々は、我々のとる手段、つまり我々は革命を荷い、生かし、守ることができるという一貫性ゆえに、将来に対して自信をもつことができるのである。我々は、いちぢくの果実はあざみのしげみから育ち、生命中心の社会が広汎な殺りくから育ってくるといったような経験を希望する必要はないのである。恐怖からの自由、個人を解放するであろうところの愛する能力についての決意も、同じく人類により高度な進化をもたらすであろう。

協会日誌

▽9月19日　「東京キッドブラザース」のヨーロッパ巡業に加わり、映画「ユートピア」を制作した古沢憲吾氏が来訪する。東宝の監督を止め、自己資金数千万円をかけて作ったというこの映画に賭ける氏の情熱が伝わってきた。

▽9月20日　事情で長いこと閉鎖されていた山岸会の東京案内所がこの日から再開される。新しい案内所も以前と同様高田馬場。住所、電話番号は「告知板」参照

▽9月21日　北海道教育大学の草刈善造氏が来訪。

▽9月24日　「新しき村」対「もぐら・振出塾・協会の混成チーム」の組み合わせで、ソフトボールゲームを行なう。

▽9月25日　神田孝一氏が台湾で亡くなる。「土曜講座」や「断食研修会」等で、神田氏から影響を受けた若者の数は多かった。彼から学んだことをどう生かしていくかが、残された我々の課題だろう。

この日の夜、「非暴力訓練セミナー」のために来日していたフィラデルフィア・ライフセンターのC・モア、C・エッサー両氏の送別会が、東京のフレンズセンターで行なわれる。

▽9月27日　秋田で「月刊しゃろーむ」を刊行している近江郁氏が来訪。

▽9月28日　ヤマギシズム豊里実顕地の堀田俊夫氏が来訪。

▽9月29日　日中国交樹立。

▽10月1日　第9回キブツ研修生の第三回家族会が、代々木の青少年総合センターで行なわれ、四五名の父兄が出席。

一方、協会の事務所では、11月14日出発の第10回研修生グループが集まって、6時間にわたるミーティングを行なう。

▽10月8日～10日　山梨県金峰のSCIトレーニングセンターを会場にして、日本人の手による「非暴力訓練セミナー」が行なわれた。協会関係からは哲の他に中島泉、山岡静代、吉田祐治の各氏が参加した。

▽10月13日　この日に前後して、四つのキブツに滞在、研修を続けていた第9回グループが現地解散した。大部分の研修生が、来年の春までには帰国する予定。

▽10月14日　FIWC関東の阿木幸男君が、半年の予定でアメリカのライフセンター共同体で生活するため羽田より出発。

▽10月18日　生活創造協会の若宮章嗣氏が共同体研究会で話す。テーマは「生活の創造と私の体験」狭い協会の事務所が30人もの参加者でいっぱいになった。

▽10月21日　ヤマギシズム多摩農場の坂本氏ら来訪。

備北開拓から中尾君来訪。

▽10月23日　アメリカの共同体を取材していた「朝日ジャーナル」の高瀬氏が来訪。

▽10月24日　イスラエル・ヒスタドルートの書記次長イエルハム・メッシェル氏が、家の光会館で講演。テーマは「未来へ向けての実験――イスラエルの協同組合運動について」で、百名近い人々が集まった。

▽10月25日　関西から自由連合の杉原哲生君来訪。「自由連合」誌が今度終刊になるため、その処理をするという。

▽10月28日　北試の寺田任氏が来訪。

キブツ・ガンシモエルのアハロン・ブレネル氏来訪。日本の共同体を見学してみたいという。

▽10月29日　11・12合併号の最後の原稿を印刷所に入れる。

▽10月31日　第11回キブツ研修生の募集〆切り。11月中に面接をすませる予定。

神宮の森にも落葉が舞い、いよいよ秋も深まってきた。